

平成26年度 調査遺跡発表会

# 金井東裏遺跡と 渋川市の古墳時代



日時 | 10月4日(土) 午後1時～午後4時20分  
会場 | 渋川市民会館 大ホール



公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
渋川市

## ごあいさつ

群馬県埋蔵文化財調査事業団は、昭和53年7月に財団法人として設立以来、国、県が行う鉄道や道路などの公共開発事業に先立ち、工事区域内にある埋蔵文化財の発掘調査を行い、その成果を発掘調査報告書として刊行し、その数は、平成25年度末までに587冊に達しています。

発掘調査報告書刊行のためには、土器や石器の接合や復元など、時間がかかる作業を必要とします。そのため、大規模な発掘調査の場合、発掘調査報告書の刊行が発掘調査が終了して数年後になってしまうこともあります。

そこで、発掘調査の成果をいち早く県民の皆様にお伝えすることを目的に、平成2年度から普及啓発事業の一環として、この調査遺跡発表会を開催し、今年で25回目となります。前年度までの発掘調査の中から、全国的にも注目される県内の遺跡について、最新情報を知ることができるため、毎年多くの方にご来場いただいております。

今年の調査遺跡発表会は、「金井東裏遺跡と渋川市の古墳時代」と題して、渋川市との共催で行うこととなりました。地元の自治体との共催は初めてのことです。

ご存じのように榛名山の噴火により埋没した金井東裏遺跡は、「甲を着た古墳人」や、噴火から避難する様子を示す数多くのヒトの足跡などの発見により、平成24年12月の現地公開以来、国内外から注目されている古墳時代の遺跡です。この金井東裏遺跡のほか、渋川市が調査を行った国史跡となっている黒井峯遺跡、県史跡の中筋遺跡を加え、榛名山の噴火で被災する前の人々の暮らしぶりを明らかにしようとするのが本日の発表会の目的です。

1500年前の渋川市の様子を渋川市民の方に先ず理解していただき、そこから、渋川市の古墳時代の文化のすばらしさを県内に広め、さらに群馬県の古墳時代の豊かさを国内に伝えていく、まさに「古代東国文化の発信」です。この調査遺跡発表会が、群馬の古代史の魅力発信を渋川市と事業団が連携して始められるきっかけになることを、心から願う次第です。

最後になりましたが、共催をいただき、事前に広報や会場準備等に多大のご尽力をいただいた渋川市に深く感謝申し上げますとともに、皆様には、今後とも当事業団が実施する調査・研究・普及啓発事業に対し、より一層のご支援をお願いいたしまして、開催の挨拶とさせていただきます。

平成26年10月4日

公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 吉野 勉



# 渋川の古墳時代遺跡群の概要

公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
資料2 課長 徳江秀夫

## 1 金井東裏遺跡理解のために

ここでは金井東裏遺跡をはじめとした今回の発表会で報告される各遺跡の所在地や形成時期、古墳時代に起きた二度の榛名山噴火災害との関係について報告し、発表会における共通理解を得ることを第一の目的としたい。

次に渋川の古墳時代遺跡群の概要にふれ、渋川市域の古墳時代の全体像を理解するための基礎的情報を提供したい。

## 2 各遺跡の所在地

渋川市は群馬県のほぼ中央部、関東平野と利根・吾妻の山間地との接点に位置する。現在の市域は赤城山・子持山・小野山・榛名山の稜線にほぼ囲まれた範囲である。

発表会で対象とする地域を、山体や河川などの地形をもとに自然地理的にみると、中筋遺跡は榛名山東麓の末端部に、金井東裏遺跡は榛名山北東麓の末端部に位置している。黒井峯遺跡は子持山の南側、吾妻川左岸の河岸段丘上、白井・吹屋遺跡群は利根川右岸の河岸段丘上に位置している。

## 3 各遺跡と榛名山噴火災害との関係

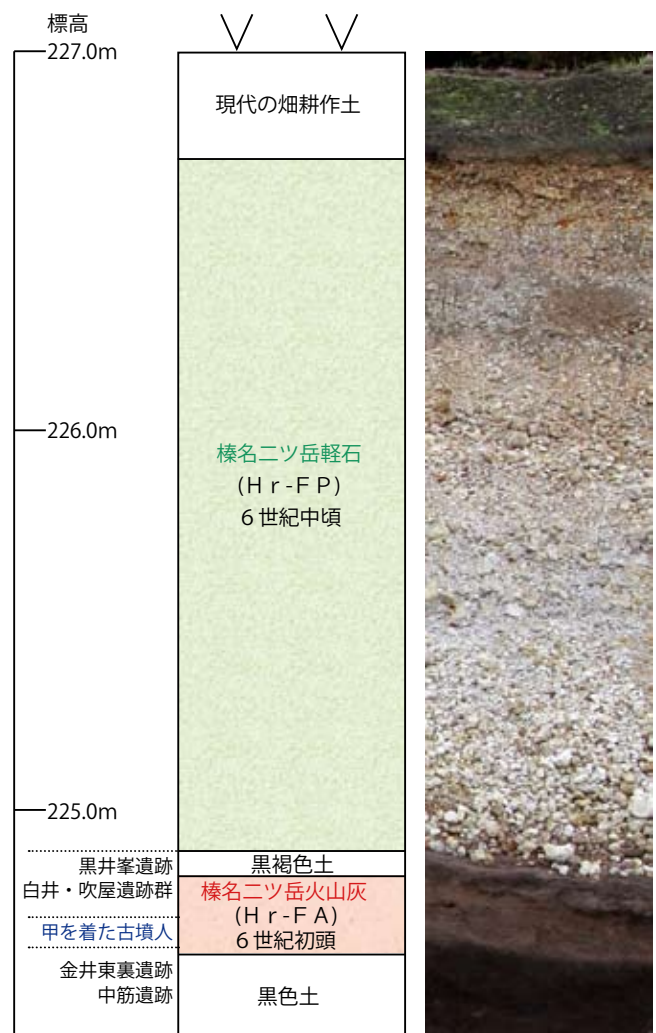
### (1)二度にわたる榛名山の噴火

渋川市域は古墳時代に二度起こった榛名山の大噴火によって甚大な被害を受けた地域である。写真は本日発表のある金井東裏遺跡における土層である。堆積状況から二度の榛名山噴火の様子が明瞭に認められる。土層の一番上に見られるのが厚さ30cm、現在の畑の耕作土である。その下に厚さ2mの軽石が堆積している。この軽石が榛名山の二度目の噴火時に降り積もった榛名二ツ岳軽石(Hr-FP)である。その下は厚さ5cmほどの黒褐色土をはさんで、厚さ30cmの灰色をした火山灰と火砕流堆積物の層となっている。これが、一度目の噴火によって堆積した榛名山二ツ岳火山灰(Hr-FA)である。

### (2)榛名山二ツ岳火山灰(Hr-FA)

Hr-FAを堆積させた一度目の噴火は6世紀初頭に起きた。噴火は短い期間に、複数回くり返されたとみられ、細粒の火山灰、火砕流堆積物、軽石とS<sub>1</sub>からS<sub>15</sub>までの15層のユニットに分けることができる。マグマ水蒸気爆発で舞い上がった火山灰は、給源から東～南東方向の広範囲に降下した。遠くは給源から100km離れた栃木県宇都宮市や埼玉県鴻巣市まで達している。

今回報告のある県指定史跡の中筋遺跡と金井東裏遺跡は、この火山灰や火砕流堆積物により大きな被害を受けた遺跡である。そして、金井東裏遺跡で発見された「甲を着た古墳人」をはじめとした4人の古墳人は、最初に降り積もった火山灰上にいた時に発生したS<sub>3</sub>の火砕流で被災している。給源からの距離は中筋遺跡が8km、金井東裏遺



金井東裏遺跡の土層柱状図

跡が8.5kmである。火砕流は吾妻川を越え、白井・吹屋遺跡群にまで達していることが倒木痕の検出から確認されている。

### (3) 榛名二ツ岳軽石 (Hr-FP)

Hr-FPを堆積させた二度目の噴火は6世紀中頃に起きた。Hr-FAを堆積させた噴火との間隔は30年ほどと考えられている。この時の噴火は給源から北東方向に大量の軽石を降下させた。上空の気流に乗り、給源から300km離れた宮城県多賀城市でも確認されている。大量に噴出した軽石は2cm前後からソフトボール大のものまであり、19のユニットが確認されている。

国指定史跡の黒井峯遺跡の集落と白井・吹屋遺跡群の馬の放牧地は、この軽石で埋没していた。黒井峯遺跡は給源からの距離が10km、軽石の厚さは2mである。なお、二ツ岳はこの噴火の後に出てきた溶岩ドームである。

二度の榛名山の噴火については歴史上に記録資料(文献資料)が全くない。Hr-FA・Hr-FPの堆積の時期については古墳時代の土器の編年研究を基礎に導き出されたものである。Hr-FAの堆積年代については、この噴火で埋もれた樹木の年代測定の結果からその時期を5世紀末とする考え方も提起されている。この点については今後、慎重に検討していきたいと考える。

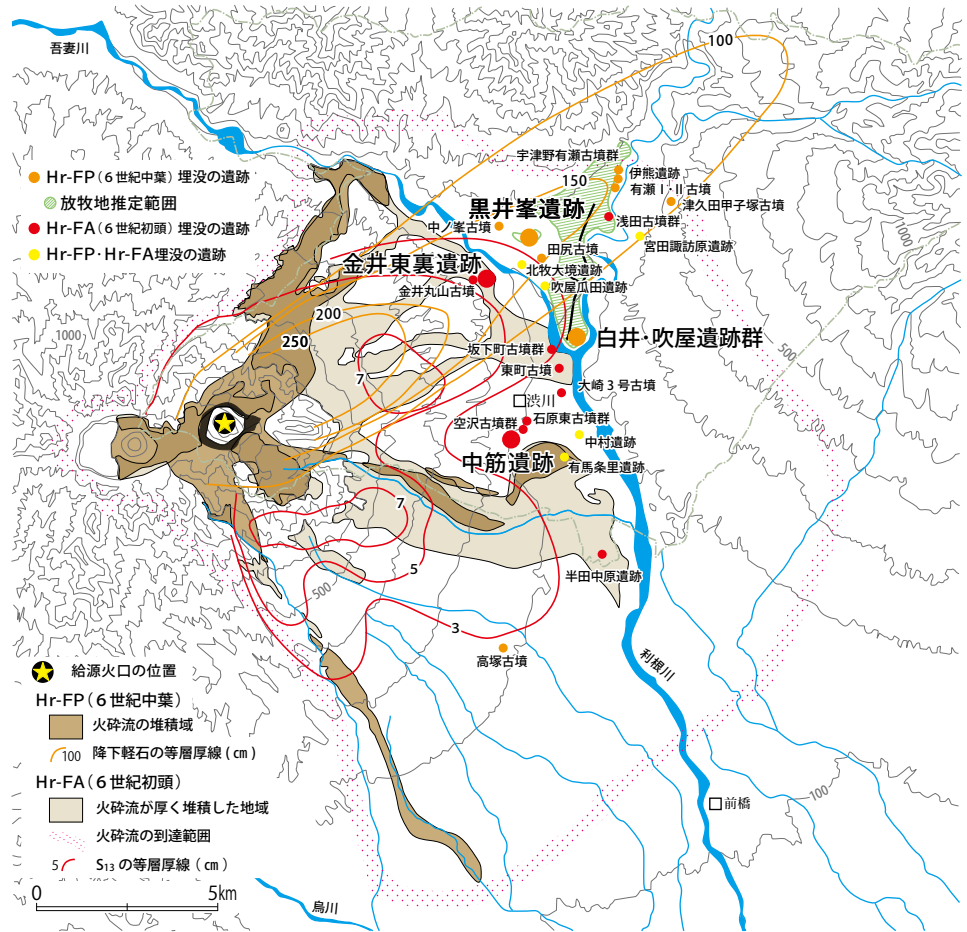
## 4 渋川市域の古墳時代遺跡群の概要

### (1) 集落・田島の変遷

渋川市域ではHr-FA、Hr-FPの下から数多くの遺跡が発見されている。その調査成果を見るとこの地域が二度の榛名山噴火により壊滅的な被害を受けたことを知るようになる。それとともに厚く堆積した火山噴出物により被災時の地表面が保護されたことから、当時の集落、田島の様子を詳細に観察することが可能となった。

また、二度の榛名山の噴火による火山堆積物を介在させることにより、5世紀後半から6世紀前半にかけての土地利用の変遷を時間の経過に沿ってたどることが可能となる。例えば、有馬条里遺跡では弥生時代中期から古墳時代中期には集落であった場所が、古墳時代後期には畠へと変化している。この畠はHr-FAで埋没するとその後に水田として造成され、さらにこの水田がHr-FPで埋没した後は再び集落へと転換し、それが平安時代まで継続することが発掘調査の成果から明らかとなっている。

有馬条里遺跡の事例は特別でない。吾妻川の北側の下位河岸段丘上に位置する北牧大境遺跡や中郷田尻遺跡などの集落遺跡においても土地利用の変遷過程を知ることができる。これらの遺跡ではHr-FA・Hr-FPに埋没した集落、田島、馬の放牧地などが発見されている。Hr-FAに被災した際には、これらの遺跡の周辺では集落を移動せず、人々はその周辺で生活をしている。被災状況に応じて集落、水田・畠、放牧地として土地利用の継続や転換を考え、いったん開発した水田は用



渋川市の古墳時代の火山噴出物とおもな遺跡 (早田 2000、2003 を著者の助言をもとに編集)

早田勉 2000 「6世紀榛名山の噴火で埋もれた遺跡群」『日本の地形』  
2003 「最終氷期以降の自然環境の変化」『高崎市史』通史編



水系の復旧に努め、被災以前の耕作を継続していることを発掘調査の成果から確認することができる。

なお、渋川市域では現在のところ三ツ寺 I 遺跡のような豪族居館とされるような方形区画は発見されていない。

## (2)古墳の分布

最後に古墳の分布状況について見てみたい。

金井東裏遺跡の調査ではHr-FA降下以前、5世紀後半に築造されたと考えられる円墳2基が発見されたが、渋川市域からはこれらの古墳と同時期に築造されたと考えられる古墳や古墳群が多数発見されている。榛名山山麓とこれに続く利根川右岸の平坦面上には、南側から半田中原遺跡、空沢遺跡、石原東古墳群、大崎古墳群、東町古墳、坂下町古墳群、金井丸山古墳などがある。旧子持村地域では浅田遺跡の古墳群がこの時期の築造である。

このような古墳や群集墳の充実ぶりは県内の他地域の状況と何ら遜色のないものである。集落と古墳の分布からは、5世紀後半、当該地域において小地域を単位に地域開発を推進・成功させた有力者層の存在が想定される。そのことはHr-FA下から発見される田畠のあり方からも明らかである。ただし、現在までのところ当該地域内に前方後円墳の確実な例は確認されていない。

また、これらの古墳の中には東町古墳や坂下古墳群に見られるような方形の積石塚や空沢遺跡の礫床を有する土坑、空沢遺跡出土の韓式系土器や金井丸山古墳出土の罎子(毛抜き形鉄製品)など古墳造りや副葬品の一部に朝鮮半島との交流を強く印象づけられる要素が見られる点は注意を要するところである。

Hr-FA降下後に築造され、Hr-FPにより埋没した古墳の分布は、Hr-FAの被害から復旧・復興が進められたことを証明している。調査事例のみから単純にその全容を判断することは困難であるが、これまでの調査例としては、空沢遺跡、中ノ峯古墳や田尻2号古墳、丸子山1区13号積石塚、津久田甲子塚古墳などがあり、旧子持村地域に充実している。特に、積石塚を含む円墳26基と小規模な円墳状遺構27基から構成される宇津野・有瀬遺跡の古墳群の存在は、その南側に展開する馬の放牧地との関連性を考える必要がある。



有馬条里遺跡 Hr-FA 下畠と道



北牧大境遺跡 Hr-FP 下水田

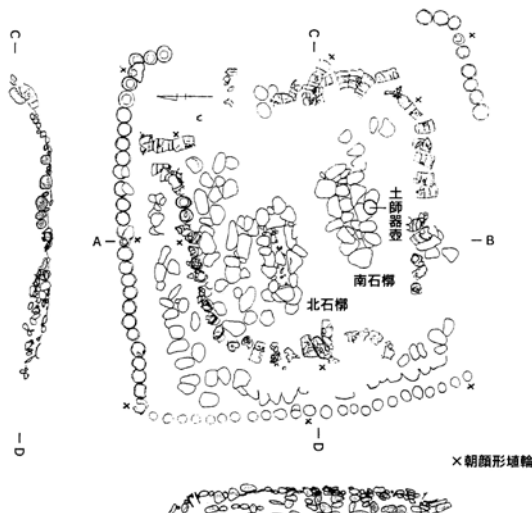


Hr-FP に埋没していた宇津野・有瀬遺跡の古墳群

## 5 まとめ

渋川市域の古墳時代遺跡は榛名山の二度の火山災害により堆積した火山噴出物により集落や田畠、古墳が極めて良好な形で保存されており、他地域では知ることのできない豊富な情報が残されているという特性をもっている。

また、渋川市域はHr-FA・Hr-FPを鍵層に、遺跡相互の時間的な前後関係や同時性を知ることが可能となるとともに、5世紀後半から6世紀前半の時期の個々の遺跡、そして、一定の範囲内における居住域や生産域の変遷を細かく知ることができる貴重な地域である。



東町古墳の墳丘と円筒埴輪列

(群馬県史資料編3、373頁、図168から転載『群馬大学史学研究室原図』)

# 黒井峯遺跡の調査

## —軽石で埋まった古墳時代の農村風景—

元渋川市教育委員会  
文化財保護課長 石井克己

### 1 遺跡の概要

国指定史跡黒井峯遺跡は6世紀中頃の古墳時代後期の集落跡で、吾妻川左岸の河岸段丘上に位置している。遺跡は榛名山の火山爆発による被災集落で、厚さ2mに達する軽石層に覆われている。調査は昭和57年の第1次から平成10年の7次まで断続的に行われ、被災家屋50棟とその周辺の遺構(泉や農耕地等)を明らかにした。被災家屋には竪穴式建物(住居)、平地式建物(住居、納屋、作業小屋、馬小屋など)、高床式建物(倉庫)等があり、集落研究やその景観復元に大きな影響を与えた。

### 2 調査の成果

遺跡のある子持地区に限定すると、遺跡での軽石層は厚さ2mに達し、軽石粒による単純な堆積となる。軽石自体は、降下に際しては熱いものの火災を引き起こすには至っていない。2mの堆積は比較的短時間に大半が積もったと見られ、多くの家屋は全壊・倒壊から免れており、雪で覆われるような状態で埋没したと考えられる。屋根の陥没現象は噴火が終息してからである。このため各種の建物や構造物自体(植物材)は朽ちたとはいえ軽石層の中に高さ1.5mまでその痕跡が残され、出入口を確認している。一方で、かつての地表は細粒の軽石で覆われ当時のままの形状を保持し、地表面情報としては足跡(人、馬)、道、祭祀跡、泉、水田(小区画)、畑(小区画の畑、耕起直後の畑、高畝や広畝などの各種の畝立した畑など)、樹木(自然木、樹木列)など様々な遺構や痕跡が確認される。これらの遺構は災害直前の状態であるが、詳細にみると噴火前年もしくは数年前の遺構(風化状況の異なる遺構痕跡として)も含まれ、土地利用の経年変化と集落内の家屋変遷をも捉えることが可能となっている。

集落構成は竪穴式建物と垣に囲まれた平地式建物群が基本形で、調査区内から大小7つのグループが存在する。それぞれの単位は細部で高床倉庫、円形作業小屋、馬小屋等の有無で性格の違いが見受けられる。発掘当初では各々独立したものと捉えたが、地表面に残る人の踏み跡の広がり、周囲の道の配置と交差点、敷地の境と考えられる柵列(一周せず部分的に設けられる)などから、この7単位は三つの大きな集団(単位群)と判断される。こうした事例は黒井峯遺跡だけでなく、近接する西組遺跡、田尻遺跡、八幡神社遺跡など似た構造が確認されている。

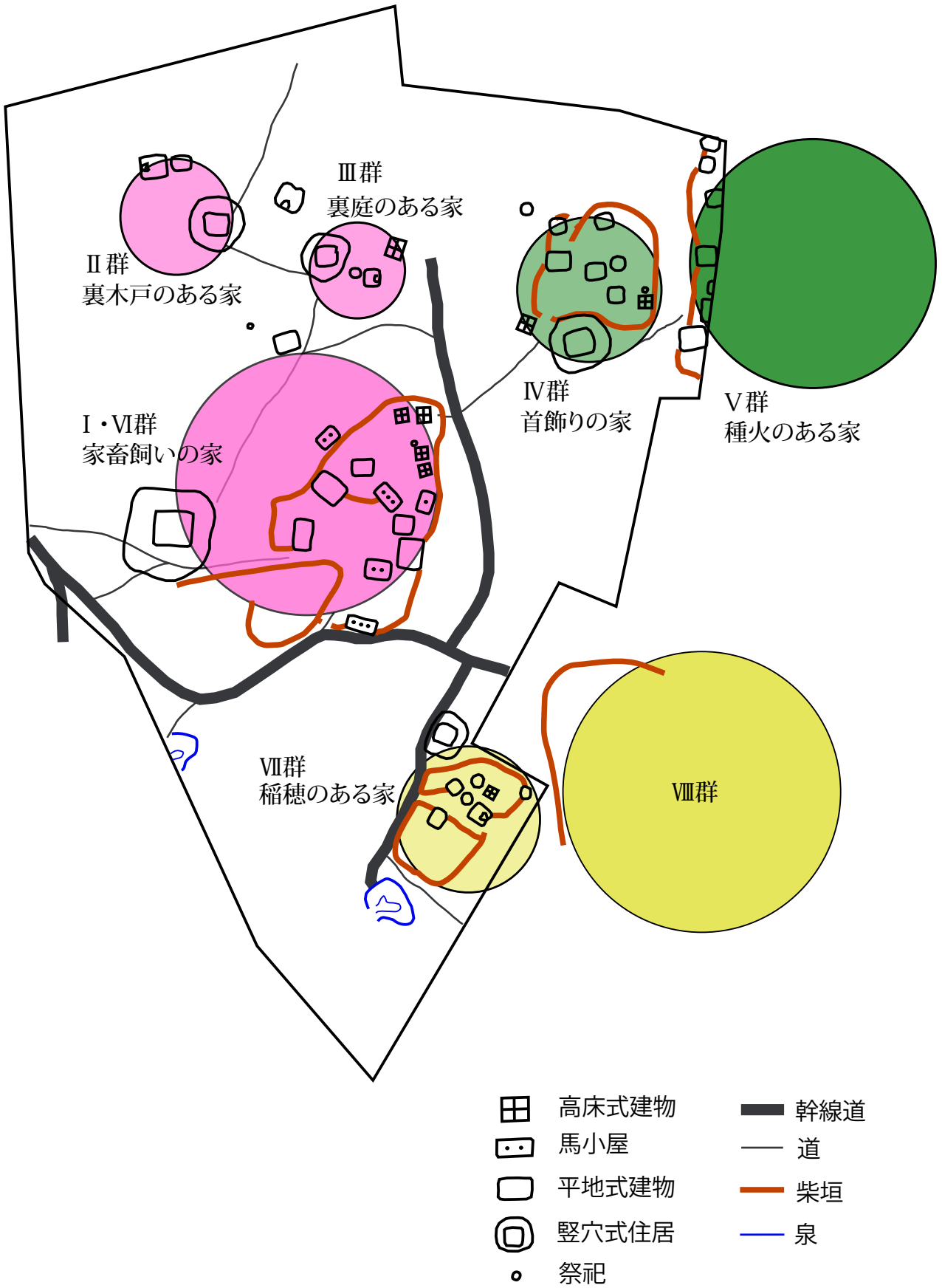
ムラの生活基盤は、遺構から水田、畑の農業と馬の飼育を中心としたものである。ただし、畑作は黒井峯に限らず周辺遺跡でも多数確認されるものの、災害時の状態から割り出すと使われている面積は少ない。馬に関しては、単位群でも中心となる単位に馬小屋があり5棟存在する。間取りは15部屋で、構造的には開放型と閉塞および一部遮蔽の構造が見られ機能差が想定される。「飼育」としたが繁殖、訓練などあったかどうか今後の課題である。



軽石中の建物と垣跡(手前から倉庫、作業小屋、住居、馬小屋)



最初に発見された平地式建物(手前から納屋、住居)



黒井峯遺跡基本単位群模式図



# 白井・吹屋遺跡群の調査

## —古墳時代の馬の放牧地—

公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
資料統括 高井佳弘

### 1 はじめに

白井・吹屋遺跡群は、渋川市の北部、利根川と吾妻川の合流点の北西側に位置する。ここでは平成2年(1990)から17年(2005)にかけて、国道17号と国道353号のバイパス建設工事に関わる発掘調査が当事業団によって行われた。白井・吹屋遺跡群とは、その調査によって発掘された多くの遺跡の総称である。

この遺跡群は榛名山二ツ岳から10～15km離れ、Hr-FPは厚さ1～2m程度積もっている。その下面から馬の蹄跡が無数に見つかったのは、調査が開始されたばかりの平成2年のことであった。蹄跡は直径10～13cm、深さ0.5～2cmの丸く底が平らな凹みであったが、その大きさ・形状・特徴から、馬の蹄跡であると判断できた。

### 2 馬の放牧地の景観

発見された蹄跡はそれぞれバラバラの方向を向いていて、特に決まった方向に歩いているものではない。つまり、馬は広い範囲を自由に歩きまわっている状態、すなわち放牧のような状態にあったのである。しかも、蹄跡の中には子馬と思われる小さなものも混じっていたので、ここでは繁殖も行われていたらしい。これらのことから、この地域では馬の生産が行われており、調査範囲はその放牧地だったことが判明したのである。その後の調査によって、蹄跡は白井・吹屋遺跡群の全域に分布していることが分かったので、放牧地の推定範囲は約6Km<sup>2</sup>にも及ぶことになった。ここでの馬の生産規模はかなり大きいものだったのである。

ここで飼育されていた馬の大きさは、蹄の大きさから推測すると、現在のサラブレッドよりもかなり小さく、体高125～135cm程度の中型馬であったと思われる。日本の在来馬と比較すると、木曾馬程度の大きさとなる。

Hr-FP下の地表面は、畦状遺構と呼んでいる、幅1～3m、高さ10cm程度の細長い土盛りによって、いくつもの区画に分けられており、その中に、人や馬が歩いてできた踏み分け道が何本も伸びていた。その他、ごく一部には畝(うね)だてされ

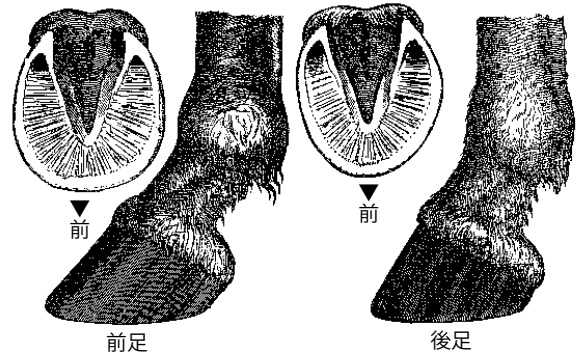


Hr-FP 下面で見つかった馬の蹄跡 (白井北中道遺跡6区)  
白線でマークしたものが蹄跡。





馬の蹄跡（吹屋犬子塚遺跡Ⅴ区）  
上が前。先が丸いので前足だと思われる。



馬の蹄の形状  
A.Goubaux and G.Barrier "The Exterior of the Horse" 1982 より



畝跡の発掘状況（白井北中道Ⅱ遺跡Ⅱ区）  
畝（うね）立てされた畝はごく一部で発見できた。



畦状遺構の様子（吹屋中原遺跡Ⅱ区）  
畦状遺構で区画が作られている様子が分かる。



踏み分け道（吹屋犬子塚遺跡Ⅳ区 6号道）  
人や馬が歩いて凹んでいる。表面は堅い。

た畝も見つかっているが、Hr-FPの噴火の時にはすでに収穫が終わって放置状態になっていたらしく、表面には馬の蹄跡が残されていた。

また、遺跡内各地点の詳細な観察・分析により、当時の地面にはススキが数多く生えていたことや、立木がまばらにあったこと、何回かの野焼きが行われていたこと、広い範囲に土を耕したような痕跡がみられることなどが判明している。このように、馬の蹄跡が残っていた地面にはいろいろな痕跡が残されていた。

### 3 本遺跡群調査の意義

このような痕跡から当時の土地利用がどのように復元できるかは、畝耕作との関連から複数の説が提起されているのが現状で、いまだに定説はない。しかし、この周辺が大規模な馬の生産地であったことは間違いのないと言える。馬形埴輪や馬具の出土などでその存在が知られていた古墳時代の馬が、実際の生産の場からも検討することができるという点で、本遺跡群は非常に重要な意義を持っている。

# 中筋遺跡の調査

## —火山灰と火砕流に襲われたムラ—

渋川市教育委員会  
文化財保護課長 小林良光

### 1 はじめに

中筋遺跡は、渋川市行幸田に所在し、榛名山東麓台地の南を向いた傾斜面上に位置している。

榛名山二ツ岳の火口からは8km程東にあって、谷筋を流れ下ったHr-FAの火砕流により竪穴住居や平地式建物が焼失・埋没するなど、壊滅的な被害を受けた集落遺跡である。火砕流の熱で火が点いた建物の部材は、その上に火山灰が堆積したことで蒸し焼き状態となったため炭化材として残り、竪穴住居、平地式建物の構築方法や建築部材の樹種等、多くの情報を提供してくれたのである。

この結果、平成4年に群馬県史跡に指定されるとともに、これらの分析を基に、所在地には竪穴住居、平地式建物、祭祀遺構等が復元され、史跡公園となっている。

### 2 調査の成果

Hr-FA下から、竪穴住居4棟、平地式建物6棟、祭祀遺構、畠、垣根、道等が発見された。竪穴住居4棟を中心に平地式建物3棟、祭祀遺構がまとまりと見られ、これらを取り囲むように垣根が廻っている。

**竪穴住居** 竪穴住居4棟は、周堤帯を連結した状態で確認された。

竪穴住居の構築は、まず地表面を70cm程掘り込み、掘り出した土を住居周囲に仮置きすることから始まり、支柱4本を立て上部を横木で組み、住居壁から40cm外側を垂木尻として垂木を4面に設置し、横木を使い屋根組みを作る。屋根組み上にはカヤ材を縦横に葺き、垂木尻を固定させるため仮置きしていた土を土塁状に寄せて周堤とした後、屋根の上に土を載せ土屋根とする。最後に土屋根の上に草葺きし仕上げている。

1号竪穴住居は東西6m・南北5m・深さ1.5mの規模で、支柱穴は4本、カマドは東壁中央に、貯蔵穴は南東コーナー部に設置されている。出土遺物は土師器甕、小甕、坏2点で、ほかに径40～50cmの木製曲物の側板が炭化状態で観察された。1号竪穴住居の炭化材の樹種同定では、垂木・横木ともオニグルミの使用頻度が高く、コナラ属・ムラサキシキブ属・カバノキ属が使われている。これに対し2号竪穴住居は、ほぼコナラ属で構築されたと分析されている。また、南20mの8次調査地点の同時期の竪穴住居は、コナラ節・クヌギ節・オニグルミで構築されており、同時期に建築・使用された竪穴住居でも、建築材に相違があることが指摘されている。

**平地式建物** 平地式建物には、カマドを有する建物3棟と、カマドを持たない建物3棟がある。

平地式建物の構築は、まず高さ1.5m程の縦棧を40cm間隔で並べ、横棧でつないで4面の骨組みを作った後、壁にカヤを葺き、別個に作ったカヤ葺き屋根を乗せたことと推定されている。

1号平地式建物は一辺4mの規模で、東辺中央南寄りにカマドが設置されている。カマドの回りに土師器坏、高坏、甕が置かれていた。建築材の樹種同定では、縦棧はトネリコ属・ヌルデ・サクラ属、垂木はコナラ節・クリ・



火砕流で被災した竪穴住居（1号～4号竪穴住居）



平地式建物（1号平地式建物）



サクラ属と同定されており、部位により樹種選定が行われた可能性が指摘されている。

カマドを持たない平地式建物3棟は、69個体の土器を出土した土器保管小屋、大型の須恵器甕を地中に埋め込んだ酒作りの小屋、米・粟を出土した穀物貯蔵小屋である。穀物貯蔵小屋には、火山活動が沈静化した後、食糧を調達するため厚く積もった火山灰を掘り起こした跡が残っていた。米・粟ともに炭化し食することができない状態になっており、悲嘆に暮れる様子が垣間見えるようである。

### 3 周辺の遺跡

**畑中B遺跡** 中筋遺跡の東300m程に位置する遺跡で、火山灰直下の面で、竪穴住居1棟と積石塚1基、畠が調査されている。

竪穴住居は南北5.95m・東西5.65m・深さ1mを計測する。噴火の起こる直前に焼失しており、床面上に垂木、横木他の建築材や屋根材であるカヤが炭化状態で残り、それを覆うように崩落した土屋根土が波状に堆積し、直上に火山灰 $S_1$ が堆積している。支柱穴4本は柱穴側が土屋根上に、反対側が火山灰 $S_1$ 上に斜めに倒れており、火砕流による倒壊が想定される。東辺中央に設置されたカマドには、甕2個体が架かった状態で残っていた。建築材の樹種同定を行った結果、支柱・垂木・横木等ほとんどがクリと同定された。

積石塚は竪穴住居の西14mにある。東西3.0m・南北1.7mの範囲に礫が分布し、遺骸埋葬施設は内法で東西2.28m、幅40cm前後を計測する竪穴式石槨である。石室天井の東半は既に壊れ内部に落ち込んでいたが、これを考慮すると、構築面からの高さ60センチ前後の積石塚と推定され、坂下町古墳群1～5号墳に類似している。

**空沢遺跡** 中筋遺跡の北東500mにあって、火山灰Hr-FAに埋もれた古墳43基、軽石Hr-FPに埋もれた古墳2基、軽石Hr-FP上に10基の計55基が調査された。

火山灰に埋もれた古墳は、5世紀後半代を中心に形成された初期群集墳で、周溝が回り葺石が施された円墳を主体に、周溝を持たない葺石墳、積石塚、土坑墓が見つかっている。積石塚や坑底に石床を有する土坑墓、朝鮮半島系の土器の出土は、渡来人との関わりを想定させるものである。



中筋ムラのくらし（第1次・2次・7次調査の調査結果から復元）

# 金井東裏遺跡の調査

## —古墳人の生活空間—

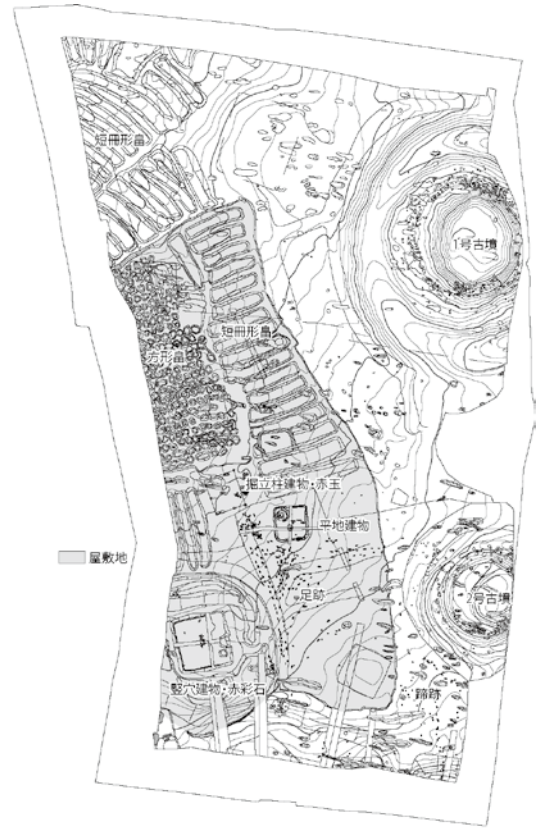
公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
調査2課長 桜岡正信

### 1 はじめに

甲を着た古墳人の発見で話題となった金井東裏遺跡の発掘調査は、国道353号金井バイパス(上信自動車道)建設に伴って平成24年9月に開始し、平成26年6月までの調査で、総延長約600m、総面積約2.1万㎡のほぼ90%の調査が終了した。この間、平成24年11月19日の「甲を着た古墳人」の発見に続いて3人の古墳人が姿を現した。また、祭祀遺構、古墳、竪穴住居、平地建物、畠、道などの他、赤玉や剣菱形杏葉などの思いもよらない遺物の出土もあり、重要な発見のあった調査区は、平成25年12月にHr-FA下の現状保存が決った。また、平成26年4月からは、金井東裏遺跡の南にある金井下新田遺跡の調査も開始され、新たな情報が加わりつつある。そこで、これまでの重要な発見を振り返りつつ、どのような空間の中で古墳人たちが活動していたのかをみてみよう。

### 2 古墳人と被災状況

金井東裏遺跡で発見された古墳人は、甲を着た古墳人(成人男性)、乳児(性別不明)、首飾りの古墳人(成人女性)、幼児(性別不明)の4人である。先の3人は、調査区を西から東へと横断する溝の中から発見されており、幼児は首飾りの古墳人の北西方向の平坦な場所で発見された。4人の古墳人は、6世紀初頭の榛名山の噴火に伴う火砕流で死亡したものである。興味深いのは、古墳人の被災前の動きが想定できることである。甲を着た古墳人は、小札甲を着装し、冑を両手に持つようにして顔の下に置き、ひざをついて溝の中にうずくまるような姿勢で火砕流に襲われたように見える。首飾りの古墳人は、道が溝と交差する場所で火砕流に遭遇し、体を回転させながら溝の中に倒れ込んだと考えられている。これに対し



9区



4区

金井東裏遺跡4区・9区全体図



金井東裏遺跡・金井下新田遺跡の位置  
(国土地理院『金井・鯉沢』1/25000)





2号墳主体部副葬品出土状況

て、幼児は調査区の西側で被災し、発見された場所まで大の字の姿勢のまま火砕流に流されたらしく、直前の動きはわからない。

甲を着た古墳人の被災状況については、発見当初の見解は修正の必要がありそうである。それは、甲を着た古墳人は「荒ぶる山の神を鎮めるための祈り」の最中に被災したのではない可能性があるということである。その根拠は、小札甲をきちんと装着していない上に、肩甲等の付属具をフル装備していなかったとみられる点である。およそ威儀を正して祈りを捧げていたようにはみえないのである。また、周辺から発見された小札甲、矛なども、祈りの場に置かれたとみるよりは、避難させようとしていたとみるほうが理解しやすい状況である。

### 3 Hr-FA下の遺構分布

Hr-FA直下の遺構分布は、4区と9区以外の調査区では希薄である。古墳人4人の発見された4区では、東西に横断する溝とこの溝に沿う道、さらに北西隅で祭祀遺構が発見されているが、竪穴住居は1棟も見つかっていない。9区では東側に2基の古墳があり、わずかの空間をおいてその西側には、区画の中から竪穴住居、平地建物、掘立柱建物それぞれ1棟と畠があり、この南に接するように平地建物がみついている。これ以外の調査区では4区の南側の2区で小規模な祭祀遺構が、100mほど南の1区で平地建物と道がみついただけである。つまり、19,000㎡を超える調査範囲の中で、竪穴住居は9区の1棟しかないのである。これは、Hr-FAよりもさらに下層の調査で、5世紀後半代の竪穴住居が30棟前後もみついているのと大きな違いがある。それまで竪穴住居の造られていた場所の多くが、6世紀初頭までに竪穴住居が造られない場所へと大きく変化しているのであり、集落の再編成が行われたかのようである。

### 4 注目される遺構・遺物

**祭祀遺構** 4区北西隅で検出した祭祀遺構は、直径5.5mほどの円形の囲いの中に、土師器や須恵器の壺などを「コ」字状に配置して祭壇状の施設を設け、その中に多量の土器や玉類、模造品などの他、鏡などの貴重品や鋤先や鎌、鉄鏃などの豊富な鉄器を集積していた。特に鉄器の量は、県内各地で調査された同じ時期の祭祀遺構と比べて際立っており、豊富な

鉄器を保有する有力な人物や集団が祭祀を行っていた可能性が高い。また、鉄器の中には農具などのミニチュアと見られるものまで含まれており、祭祀用の鉄器までも生産させることのできる環境があったのであろう。

**馬** 4区の南寄りの地点で5世紀後半と考えられる層から、馬の歯が3点出土した。白井遺跡群などの調査で、6世紀中頃には馬が多数飼育されていたことが分かっていたが、今回の発見で馬が遅くとも5世紀後半には金井の地域に導入されていたことが確認された。馬の飼育は、当時としては最先端技術であり、それが国内でも早い時期に金井の地域に導入されていたことは、この地域を考える上で重要な要素である。

**古墳** 2基の古墳は、9区の東寄りに南北に並んで発見された。2基ともに周溝の埋没状況から、5世紀後半に築造されたものと考えられる。1号墳は、直径15m、高さ1.6mの円墳で、南北に2基の埋葬施設があった。副葬品から北側に女性が、南側に男性が葬られたと考えられている。注目されるのは、南側の主体部から出土した柄の上部に2つの環状の金具を付けた素環頭大刀である。国内ではあまり類例がなく、類例は朝鮮半島にありそうなのである。

2号墳は、直径8.3m、高さ0.8mの円墳で、主体部からは、刀子、鉄斧、金属環付の提碁の他に、鉄片が数点出土した。さらに墳丘裾部からは槍鉤などの工具が出土している。これらの遺物から、2号墳に葬られた人物には、鉄器生産に係わったような技術系の人物像が描けそうなのである。また、副葬品の中で提碁と刀子の組み合わせは特に注目される。刀子と提碁を身に帯びるといふ習俗は、当時国内で一般的とは考えにくく、その系譜は朝鮮半島に求められそうなのである。

**剣菱形杏葉** 9区の竪穴住居の北西側の周堤から剣菱形杏葉と呼ぶ馬の飾り金具が1点出土した。火砕流の中からの出土であり、西側から火砕流によって運ばれてきたものと考えられる。大きさは高さ19cm、幅10cmで鉄製の地板に金銅板を被せて鋏留めしたもので、もとは金色に輝いていたはずである。県内では6例知られているが、いずれも有力古墳からの出土であり、集落からの出土は極めて珍しい。本来首長クラスの人物が所有できる物であることから、そうした人物が飾り馬とともに調査地点の西側にいたものか、あるいは杏葉を保管する施設が西側にあったのであろう。

## 5 詳細調査の現況

**4人の古墳人** 乳児と幼児の古墳人は、現地で骨の取り上げまでを済ませたが、甲を着た古墳人と首飾りの古墳人は、周りの土ごと切り取って保存処理作業室へと運び、室内で詳細な調査を進めてきた。その結果、首飾りの古墳人は、身長143cmほどの30才代後半の女性で、首にガラス玉と管玉の首飾りをし、袋に入れた白玉を腰に提げていたことがわかった。

甲を着た古墳人は、身長164cmほどの成人男性であり、背中側の甲を外し内部の調査を進めたところ、腰の部分に鹿角装の刀子を持っていることや、甲内面に布や組紐の情報が残されていることなどがわかった。また、頭部と甲部分のCTスキャンによって、装着していた小札甲の前がはだけていることや、刀子の横に提碁も持っていたことがわかった。さらに、顔の下に頬当てと鋸を備えた横矧板鋏留衝角付冑があることがわかり、甲を着た古墳人が、小札甲と鉄製冑を所有するかなり高い階層の人物であることがわかった。また、刀子と提碁のセットは、2号墳の被葬者とも共通するものであり、甲を着た古墳人も朝鮮半島との関連がありそうである。

4人の古墳人の骨は、現在形質人類学的調査を進めるために九州大学大学院の田中良之教授のもとにある。甲を着た古墳人と首飾りの古墳人については、DNA分析などのさまざまな分析を進めている。

**小札甲と骨製小札** 甲を着た古墳人の西側から出土したもう1領の甲は、上下を反転させ内部の調査を進めたところ、長さ6.6cm、幅3.0cm、厚さ0.3cmの鉄製小札と同じ形の骨製小札が発見された。上から13枚、15枚、17枚と3段連なっており、胸当のような付属具と考えている。骨製小札の類例は、韓国の夢村土城で出土した4世紀代の資料があるだけで、国内には類例がない。ここにも朝鮮半島との関連を考える要素が見られるのである。

**鉄矛と鉄鍬** 鉄矛と鉄鍬は、そばに倒れていた甲を着た古墳人の持ち物であろうと考えている。鉄矛は基部に金属製の飾りがつき、さらに柄の上端には直弧文を刻んだ鹿角製飾りと金属製の帯状飾りがつけられている。直弧文という日本的な要素と金属製の帯状飾りという朝鮮半島的な要素が融合した珍しいものである。また、鉄鍬の大半には矢柄との境に骨製の丸玉がつけられており、刀子、矛、骨製小札など、鹿角や骨を多用する特徴が顕著である。

## 6 金井下新田遺跡の調査状況

金井下新田遺跡の調査で、県内では古い段階の鍛冶遺構が見つかった。この鍛冶遺構は、一辺が10mほどの方形の大型竪穴住居で、床面中央に鍛冶炉が設けられ、炉の側から送風のための鞆の羽口や砥石、さらに製品を鍛造する際に出る





金井下新田遺跡 1号住居 (鍛冶遺構) 全景 (南から)

鍛造剥片たんぞうはくぺんが多量に出土した。この鍛冶遺構の南側からも、同じ時期の鍛冶遺構と思える遺構が1基確認されており、金井下新田遺跡では集団による鉄器生産が行われていたと考えられる。

鍛冶遺構の時期は、埋没状況から5世紀後半と考えられ、当時としては最先端技術の一つの鍛冶作業が、金井東裏遺跡とは谷一つ隔てた至近の場所で行われていたのである。この鍛冶作業が行われた時期は、鉄器生産との関わりが想定される金井東裏遺跡2号墳の被葬者の活動時期とオーバーラップしており、時間的・空間的な近さから、密接な関連が想定されるのである。

## 7 甲を着た古墳人とその生活空間

横矧板鋌留衝角付冑、小札甲、矛、剣菱形杏葉、有力祭祀遺構などの存在から、金井の地域に有力な人物や集団がいたことは確実であり、甲を着た古墳人がその有力な人物であった可能性は高いであろう。しかし、この人物が、地域を治めた首長クラスの人物であったのか、技術系集団の指導的立場にあった人物なのか、その性格については今後の検討を待たなければならない。現段階でいえることは、骨製小札、矛、提砥と刀子など、この有力な人物が、朝鮮半島の習俗に通じた人物であったということである。こうした朝鮮半島との関連は、この有力な人物より一世代前とみられる古墳に被葬された2人の人物にも窺うことができるのであり、金井の地域は世代を越えて朝鮮半島との関連があった地域とみてよいだろう。

5世紀代、朝鮮半島との関連で重要視されることに馬の生産がある。また、馬生産と鍛冶技術には密接な関係があると考えられている。金井東裏遺跡と金井下新田遺跡を一連の遺跡とみると、朝鮮半島との関連、馬、鍛冶の3要素すべてが揃っているのである。しかし、これまで調査された場所は、扇状地末端の帯状の限られた範囲であり、おそらく広範囲に広がっていた集落の縁辺の一部が明らかになったにすぎないであろう。金井東裏遺跡の集落の主体は、西側から南側の広範な面に展開している可能性が高いのである。さらに、剣菱形杏葉が保管されていたのであれば、その保管施設を含む有力な人物の居館などが集落の一角にあった可能性もある。甲を着た古墳人の生活空間を明らかにしていくためには、今後これらの広範な地域に注目していかなければならないだろう。

## 平成26年度 調査遺跡発表会 日程表

### ●発表会

時 間	内 容	発表者
12:00～13:00	開 場	
13:00～13:05	主催者挨拶	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 理事長 吉野 勉
13:05～13:10	共催者挨拶	渋川市長 阿久津貞司
13:10～13:35	「渋川の古墳時代遺跡群の概要」	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 資料2課長 徳江秀夫
13:35～14:00	「黒井峯遺跡の調査 －軽石で埋まった古墳時代の農村風景－」	元渋川市教育委員会 文化財保護課長 石井克己
14:00～14:20	「白井・吹屋遺跡群の調査 －古墳時代の馬の放牧地－」	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 資料統括 高井佳弘
14:20～14:30	休 憩	
14:30～14:55	「中筋遺跡の調査 －火山灰と火砕流に襲われたムラー」	渋川市教育委員会 文化財保護課長 小林良光
14:55～15:35	「金井東裏遺跡の調査 －古墳人の生活空間－」	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査2課長 桜岡正信

### ●講 演

時 間	内 容	発表者
15:35～16:20	「古墳時代遺跡の調査の意義と活用」	文化庁記念物課 埋蔵文化財部門 文化財調査官 林 正憲
16:20	閉会挨拶	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 事業局長 大木紳一郎